



放課後の子どもたちの「居場所」づくり

伴野博美さん 杉並第一小学校の地域子ども教室「すぎっ子くらぶ」拠点リーダー

プロフィール：東京都杉並区学校教育コーディネーター。

美術大学卒業後、テキストデザイン、映像・舞台関係の仕事のキャリアを積むが、結婚と同時に退職。子どもが杉並第一小学校に入学したのを機にPTA活動をはじめた。

すぎっ子くらぶの独自の活動が認められ、平成18年3月、文部科学大臣から感謝状が授与された。

■大人の都合でなく、あくまで子どもにあわせる



▲すぎっ子たちと伴野さん（写真提供：五木田勉氏）

杉並区立杉並第一小学校（以下、杉一小）。放課後になると、教室を出た生徒たちが何人か、多目的室に「ただいま」と言いながら入っていく。ここは、「すぎっ子くらぶ」（以下、すぎっ子）という名前の小学生の放課後の居場所である。

3年前、文部科学省による「子どもの居場所づくり 地域子ども教室推進事業」がスタートし、各地で誰でも利用できる安全な児童の放課後の居場所づくりが検討されてきた。杉並区でも実行委員会を作り、平成16年9月、区内で最初の地域子ども教室（居場所）として、すぎっ子くらぶがスタートしたのだ。

放課後の小学生の居場所としては、保護者の仕事などで留守になる家庭の子ども向けの学童クラブがあるが、同教室は1年生から6年生まで保護者の就業状態などに関係なく無条件で登録でき、利用料は無料。また、小学校の施設を使っていることと、運営しているのが地域の大人たちである点が異なる。18年7月現在、区内に26校ある。すぎっ子くらぶに登録する子どもは、全校306人中132名。区内で最も多い。

伴野博美さんは、すぎっ子くらぶの企画、運営をまかされている拠点リーダー（代表のこと）である。名前の「すぎっ子」は、杉のようにすくすく育ってほしい、また、杉並区にある杉並第一小学校の生徒だということに愛着を持ってほしいから。ひらがなを使うのは、手づくり感を大事にしたいとの思いからだ。

各教室の運営・企画は、地域性や拠点リーダーの考え方による。すぎっ子の場合は、「大人の都合でなく、あくまで子どもにあわせる」という伴野さんの方針のもと、すべてが決められている。区内では珍しく、学校のある月曜日から金曜日まで開いているのも、子どもにあわせるため。

「曜日にかかわらず学校で悲しい思いをしたり、さみしかったりしたときにも、すぎっ子にすれば違う学年の子どもに会ったり、私たちスタッフに会うことで気分転換できるかもしれない。いつでもおいで、という居場所にしたかったんです」

ローテーションのスタッフのほかにも、3人の常勤がいるのも、すぎっ子の特色だ。ひとりの子どもの日々の変化に気づいたり、多面的に見るためにも、毎日見守るスタッフが必要との考えからだ。放課後から夕方5時まで（6時まで延長可能）の預かり時間のなかで、気づいたことなどを終了後のミーティングで毎日話し合う。全員が地元の女性で、三十代と四十代が中心。

共通しているのは、現在、杉一小に通う子どもの保護者のスタッフがいらないこと。すぎっ子の子どもたちとは利害関係がないため、客観的に見ることができる。子どもからすれば、近所のおばさんのような親しみと距離感が保て

る。ほとんどが15歳以上の子を持つ、母親のベテランを揃えているので、接し方や叱り方にも、経験が生かせる。

■ほんとうの友だちとは、仲間とは、を子どもに教える



▲光るもの見つけよう

すぎっ子くらぶには、健康面の注意やあいさつ、時間などに関するいくつかのルールがある。そのなかで最も伴野さんが大切にしているルールは、「すぎっ子くらぶに来ている人は、みんな仲間です。仲良くしましょう」というもの。おおぜいの子どもがいれば、ケンカなどのトラブルは日常茶飯事だ。誰が何をしたら伴野さんに言いつけに来る子どもがいれば、伴野さんにまず叱られるのは言いつけに来たほうだ。

「私に言いに来る前に、なぜあなたが注意しないの？ 悪いことをしている子がいたら、まず注意するのが仲間でしょう」

たとえば、いじめがあるのを見てみぬふりをするのは、いじめた本人より悪い、というのがすぎっ子の考え方なのだ。

伴野さんには、忘れられない言葉がある。ある教育専門家の講演で、会場にいる母親



「いちばん嫌いな人を思い出して、その人のいいところをひとつあげてみましょう」という提案に、ある母親が「まわりに嫌いな人が一人もない」と答えた。すると、その専門家は「あなたは不幸な方ですね」という言葉のあとにこう続けたのだ。「あなたのお子さんは、自分の好き嫌いなど関係なく、学校の友だちも担任の先生も選べない、そういう世界に毎日いるのです。嫌いな人がいないのは同じような価値観の人としかつきあっていないからです。それでは、お子さんのほうが先に成長していきますよ」

子は親の鏡とよくいうが、子どもの問題は親の問題であることが多い。そして自身も、母親としての過去の自分に対する苦い思いがある。

晩婚でひとり息子に恵まれた伴野さんは、とにかく育児最優先。一流の私立小を目指したものの目的をはたせず、子どもは杉一小に入学。それまでは、地域に目を向けることもなかった。それからは、子どものためとPTA役員を引き受け、PTAの副会長を2年、会長を2年努める。その後青少年委員を経て、5年前の学校教育コーディネーター制度の発足時に、第1期のコーディネーターとなる。本シリーズ第1回に登場した生重幸恵さんと同期になる。

「小学校のPTAをしているときでも、学校に用事があれば息子の様子をチェックして、子どもに、今日、なんで〇〇くんと言ひあいつたの？ なんて確認したり。会議中に冷蔵庫開けていい？ と息子が私の携帯電話にいちいち連絡してくる。今思えば、息子は息苦しかったと思いますよ。それでも当時は、自分はいい母親で、何でも私を頼りにする息子が、ただかわいかった。あの頃の子育てをやり直せるなら、今度はもっと自立した関係の親子になれるのに、と思います」

■学校の先生との信頼関係を結び、情報交換する



▲縄跳び

愛する子どもを通して、学校との関わりのなかで見えてきたもの。それが伴野さんを成長させ、変えていった。そして今、かつての自分への反省を込めて、伴野さんは毎日、子どもにも、時には保護者にも向き合っている。

子どもどうしのトラブルからケガをした子どもの親が、心配のあまり、すぎっ子も学校も長期間休ませたことがある。加害者の親は、責任をとってすぎっ子を辞めさせると言い出す。被害者の子どもの担任の教師から相談を受けた伴野さんは、双方の親に「すぎっ子で起きたことは、すぎっ子で解決させてください」と言ったのだ。「今辞めるのは〇〇くんのためにならない。短気なところもあるけれど、〇〇くんのいいところは、私たちがよくわかっています」それを聞いて、加害者の母親は涙を流したという。

また、被害者の親にも「しばらくは加害者の子どもといっしょに遊ばせないで、私たちがちゃんと見てますから、お子さんをすぎっ子に來させてあげてください」とお願いする。1ヶ月後、どちらの子どもも自然に遊べるようになり、加害者の子どもは前よりやさしくなったという。不安な被害者の親の気持ちも、情けない思いの加害者の親の立場にも寄り添うことで、本心はすぎっ子で元どおり遊びたいという子どもの気持ちを優先させる。やさしさだけでなく、信頼と責任感が伴わなければ、こうしたときの保護者を説得することはできない。

区の地域子ども教室には、伴野さんのような拠点リーダーの下に、安全管理リーダーと

呼ばれる安全管理の講習会を受けたスタッフがいて、安全マニュアルも義務づけられている。また、万一の場合の保険も完備している。さらに、すぎっ子には看護師の資格のあるスタッフがいて、病気やケガのときにも適切な対応ができる。

「学校の施設を使わせていただく以上、もしものことがあったら、表に出てくるのは学校長の名前であって私たちではないんです。だからこそ、学校との信頼関係を大事にしたい。すぎっ子の子どもである前に、みんな杉1小の子どもなんです。すぎっ子に來る前のことも、來てからのことも、学校で起きたことは両方把握できるように、先生たちとのコミュニケーションも欠かせません」

こんな居場所が、区内の全部の小学校になぜないのかと思う。放課後に施設を使うことでのリスクを避けたい学校もあるだろう。少ない報酬のボランティアスタッフが頼りの運営のため、地域によい人材をみつけるむずかしさもある。それでも、子どもたちのために何ができるかを、地域の大人が考えることがスタートラインだろう。子どもは、親も学校も含めた、もっと大きくてあたたかな社会が育てるものなのだ。

最近、腰痛でしばらく休んだ伴野さんに子どもたちから手紙が届いた。「伴野さんのいないすぎっ子はつまらないです。早く、伴野さんに叱られたいです」

大人のやさしさは、いつかは必ず子どもにまっすぐに届く。杉のようにスクスクと育つすぎっ子くらぶの子どもたちが大人になったとき、そのやさしさを次の世代に渡してくれるはずだ。

(文：紙谷清子)